

## 大槻文彦年譜（洋学に注目して）

東北大学大学院文学研究科言語学研究室 後藤 斉

2017-08-26; 2018-04-23 改訂

西暦（元号） 事跡

- 1847 (弘化 4) 旧暦 11 月 15 日(冬至)、**江戸木挽町(現在の東銀座、歌舞伎座の近く)**で生まれる。実名清復、通称復三郎、のちに号、復軒(「復」の字は冬至の「一陽来復」から)。父は磐溪(清崇、愛古堂、晩年は磐翁)、祖父は玄沢(茂質、磐水)。
- 1851 (嘉永 4) **家学(漢学と詩文)**を受ける。
- 1861 (文久元) 林大学頭の門に入り、漢学修業(名目のみ)。
- 1862 (文久 2) 9 月、**洋書調所(開成所)に入り英学・数学を学ぶ**。元服。一家で仙台に帰住。
- 1863 (文久 3) 5 月、仙台藩校養賢堂に入り文武の修業(漢学、剣術)、のち諸生主立(助教)に。
- 1865 (元治 2、慶応元) 「正権論」。「平泉遊記」(平泉は 2011 年にユネスコ世界文化遺産登録)。
- 1866 (慶応 2) 閏 4 月、**洋学稽古人を命じられて養賢堂で蘭学・英学を学ぶ**。10 月、江戸に出て開成所に再入学。翌年にかけて横浜で米国人 J. H. Ballagh と D. Thompson から英学の個人教授。
- 1867 (慶応 3) 学資を稼ぐため英国人牧師 M. B. Bailey の『万国新聞紙』の編集員(「日本最初の新聞記者」。「大英国史」)。10 月、仙台藩江戸留守居役大童信太夫に伴って京都に。
- 1868 (慶応 4、明治元) 1 月、鳥羽伏見の戦いを実見し、『慶応卯辰実記』(のちの写本が宮城県図書館蔵)。仙台に戻った後、5 月、藩命で江戸で「探偵」(銃器弾薬の買入も)。9 月、プロシア船を雇い彰義隊残党らと仙台に戻るが、仙台藩は降伏。10 月、横浜に逃れ、Thompson の下で英学。
- 1869 (明治 2) 4 月、プロシア公使館に起居。入牢した磐溪のため、仙台に戻って助命活動(翌年元旦に出牢)。8 月、『日本国誌』訳稿(1860 年米国刊の地理書の抜粋。早稲田大学蔵)。
- 1870 (明治 3) 東京に戻り、箕作秋坪宅に起居。大学南校に入り、**英学・数学を学ぶ**。『北海道風土記』(30 巻)成稿(宮城県図書館蔵)。
- 1871 (明治 4) 箕作の**英学私塾三叉学舎**に入り、9 月、幹事(塾長)。アルバイトで「賃訳」。このころから日本文法を志し、国学を独学。**箕作奎五墓誌**を撰文(谷中霊園)。
- 1872 (明治 5) 6 月 1 日、壬申戸籍編成にあたり**文彦と改名**。兄如電(修二)、文部省で『新撰字書』の編集に参加。10 月、文部省八等出仕となり、字書取調掛で**英和对訳辞書編纂**を命じられる。『英和大事典』(第 2 卷(AI-AN)の原稿のみ早稲田大学蔵)。
- 1873 (明治 6) 太陽暦改暦。『琉球新誌』、『琉球諸島全図』。師範学校で教科書の翻訳・編集(『万国史略』翌年刊)、文部省でセウエル著などから『羅馬史略』訳述(翌年刊)。宮城師範学校(変遷を経て、戦後に東北大学に包摂された後、分離して宮城教育大学)初代校長(~1875)として仙台に赴任。
- 1874 (明治 7) 『日本暗射図』(白地図)。『亞非利加誌』訳成(宮城師範学校をへて宮城県図書館蔵)。
- 1875 (明治 8) 2 月 2 日、**文部省報告課勤務となり**、西村茂樹課長から**日本辞書の編纂**を命じられる。明六社定員。諸葛信澄『小学教師必携』に序(執筆は前年)。4 月、仙台伊勢堂下(現青葉区子平町)龍雲院の林子平墓(1942 年国指定史跡)に「**前哲林子平碑**」(磐溪撰文)を建碑。洋洋社に加わり、「擬奉英国女帝書」、「ペルリ日本記行中ノ訳文一節」、「日本文法論」。如電が隠居し、家督相続。榊原芳野と『色図釈』。『万国史略 皇国部』。
- 1876 (明治 9) 2 月、成島柳北に代わり一か月間『朝野新聞』論説を担当し、「日本文章論」。『小笠

- 原島新誌』刊行。「印刷術の史」、「日本「ジャパン」正訛の弁」、「東洋印刷術の史」。12月、前期文法会第1回(1878年7月まで16回)。
- 1877(明治10) 「日本文典編輯総論」。「伊達政宗ガ遣欧使ノ記事」。『支那文典』(高第丕(T. P. Crawford)・張儒珍共著『文学書官話』,1869.に解説を付した)刊行。「君主ヲ称スル語各国相似タルノ考」。如電『日本洋学年表』(1927年『新撰洋学年表』、1965年佐藤栄七増訂『日本洋学編年史』)。如電『追遠会誌』(玄沢五十年祭記録)。富田鉄之助ら旧藩士と伊達家が経ヶ峯瑞鳳殿境内に建てた仙台藩戊辰戦争戦没者の「弔魂碑」の碑文を作る。
- 1878(明治11) 6月13日、磐溪没。10月、後期文法会第1回(1882年4月まで57回)。富田の勧めで渡英を図るが、断念。「竹島松島の記事」。北畠卓郎『小学必用仮字問答』を閲。
- 1879(明治12) 伊香保温泉で湯治し、宿の主人の依頼で『伊香保志』を執筆(のちにもたびたび逗留)。
- 1880(明治13) 『印刷術及石版術』(文部省『百科全書』(Chambers's Information for the Peopleの翻訳)の一分冊)刊行。
- 1881(明治14) 富田らと仙台造士義会を設立し、育英事業(1886年、第二代会長)。鈴木慧淳・竹中邦香・如電らと白石社を創設し、翌年にかけて新井白石の『采覧異言』、『西洋紀聞』を校訂刊行。十文字信介『農学啓蒙』を校。「蜜蜂熱地に移りて蜜を醸さぬ話」
- 1882(明治15) 『伊香保志』、『日本小史』刊行。井上哲次郎抄訳『倍因氏心理新説』を校訂。磐溪『近古史談』(1864)を『刪修近古史談』として刪修(和訳・解説)。大槻清二注『標注忠経』を校閲。
- 1883(明治16) 音楽取調掛兼勤(~1885)、「仰げば尊し」の作詞の合議に加わる。「かなのとも」(のち合同して「かなのくわい」)創立に加わる。フィース著・土屋政朝訳『刪訂教育学』を閲。
- 1884(明治17) 「外来語原考」。『言海』の草稿が完成。結婚。『磐翁年譜』。
- 1885(明治18) 「三味線志」編纂(刊行は1896/97)。『校正 日本小史』。
- 1886(明治19) 3月23日、『言海』稿本の再訂が終わり、文部省に提出(佐藤誠実が『言海』と命名、物集高見が保管)。第一高等中学校教諭(~1888)。『言語篇』(文部省『百科全書』)翻訳刊行(日本初の言語学紹介)。『古事類苑』編集委員(~1887)。富田・松倉恂らの依頼で「英学校を設立するの趣意書」(同年、半官半民の宮城英学校が新島襄校長で設立、翌年東華学校として開校)。
- 1888(明治21) 作並清亮編『松島勝譜』を校訂。「てがみのかきかた。」(この前後の大槻旧蔵「かなのくわい文献集」が東北大学図書館蔵)。10月、自費出版の条件で『言海』稿本が下賜。
- 1889(明治22) 5月15日、『日本辞書 言海』第1冊刊行。局外居士名義で『中止断行条約改正論』。
- 1890(明治23) 玄沢遺稿『金城秘鑑』を補綴(副題「仙台黄門遣羅馬使記事」で、解説を付す)。『語法指南』刊行。『東京須覧具』を起稿(国立国会図書館蔵)。11/12月、次女と妻、相次いで病没。
- 1891(明治24) 4月22日、『言海』第4冊刊行で完結。6月23日、芝の紅葉館で完成の祝宴(富田・高崎正風らの発起で、伊藤博文、勝海舟、榎本武揚、加藤弘之、菊池大麓、高田早苗、陸羯南(宮城師範学校での教え子で、大槻離任後に中退)、矢野竜溪、物集、西村、如電らが参加し、西村、加藤、伊藤らが祝辞。福沢諭吉は出席取りやめ)。
- 1892(明治25) 再婚。岩手県に転籍。宮城県尋常中学校(閉校した東華学校の生徒を編入。新入生に吉野作造。数度改名ののち仙台一中、戦後に仙台一高)初代校長、宮城書籍館(現宮城県図書館)館長として仙台に赴任(~1895)。『林子平先生年譜』。伊達家陞爵運動に協力して、翌年にかけて請願書草案(一関市博物館蔵)を起草。

- 1893 (明治 26) 3 月、松倉・大童・作並らと仙台文庫会設立(1896 年、伊達家蔵書等を含む図書館  
仙台文庫を東三番丁に開設。のち宮城県図書館蔵伊達文庫に)。茂ヶ崎大年寺の「撫松小倉翁遺  
徳碑」を撰文(小倉撫松は小倉博・進平・強らの曾祖父)。12 月、外記丁の自宅で「愛古堂所蔵  
展」開催。
- 1894 (明治 27) 「日本洋学ノ起原」、「支倉六右衛門墳墓考」(仙台市北山の光明寺に比定)、「陸奥太  
守義良親王御遺蹟考」。本多浅次郎(光太郎の兄)を教諭申請した件で文部省から譴責。
- 1896 (明治 29) 「陸奥国伊治城ノ考」(伊治城跡は 2003 年国指定史跡)。仙台市榴ヶ岡の榴岡天満  
宮(2015 年、国指定名勝「おくのほそ道の風景地」に追加)の「星恂太郎碑」を撰文。
- 1897 (明治 30) 『**広日本文典**』、『**広日本文典別記**』刊行。6 月、如電らと上野の日本美術協会で「愛  
古堂蔵品展」を開催し(追遠展覧会入場人控簿の写本が早稲田大学蔵)、磐溪遺文集『寧静閣』を  
刊(~1907)。
- 1898 (明治 31) 「**和蘭字典文典の訳述起原**」。7 月、如電次男茂雄を養子に。10 月、「一関尋常中学  
校落成式賀章」(西磐井郡中里村処士と肩書き)。
- 1899 (明治 32) 文学博士。海嘯罹災者への寄付により宮城県岩手県から木盃。『松浦玉圃伝』。「**支  
倉六右衛門ニ関スル考証**」。7 月、宮城県中学校新校舎(南六軒丁。大槻の設計)落成式に出席し、  
講演「仙台出身の蘭学家」。「高野長英行状逸話」。「松島遊覧の栞」、「**Guide to Matsushima**”  
(松島は 1923 年国指定名勝、1952 年特別名勝)。
- 1900 (明治 33) 東京市に転籍。国語調査委員(国語調査会)。『日本文法教科書』、『伊達行朝勤王事歴』  
(序で「仙台旧臣」と肩書き)。「**仮名と羅馬字との優劣論**」。「多賀国府考」(多賀城跡は 1922 年  
国指定史跡、1966 年特別史跡)。講演「洋学開祖諸哲の苦学」。
- 1901 (明治 34) 『東京下谷根岸及近傍図』。帝室博物館列品鑑査掛嘱託。「陸奥国遠田郡小田郡沿革  
考」(天平産金地涌谷説を支持)。『伊達政宗南蛮通信事略』刊行(英訳つき)。『国語綴字法教科書』、  
『日本文法教科書』。日暮里村大字金杉の新宅(雨松軒)に転居(根岸御行の松そば。松は 1925 年  
天然記念物指定、1928 年枯死)。
- 1902 (明治 35) 国語調査委員会委員、主査委員(~1913)。『復軒雜纂』刊(玄沢『**金城秘輶**』を再録)。  
下飯坂秀治編『仙台藩戊辰史』を校訂(および資料提供)。『**蘭学会盟新元会図**』(福井信敏模刻)作  
製。
- 1905 (明治 38) 「日本方言の分布区域」、「**対訳辞書の起原**」。
- 1907 (明治 40) 仙台一中校舎全焼。『**箕作麟祥君伝**』。芳賀剛太郎『誤似明弁 新案漢字典』に序文。  
**杉田玄白贈位祝賀会**で杉田の伝記を語る。
- 1908 (明治 41) 2 月帝国教育会で「**青木昆陽先生について**」を講演。3 月、黄金山神社(遠田郡涌谷  
町。1967 年黄金山産金遺跡として国指定史跡)「日本黄金始出地碑」を撰文。6 月、如電らと「**大  
槻磐溪三十年追遠展覧会**」を上野公園日本美術協会列品館で開催し、『**磐溪事略**』を刊。9 月、  
光明寺の「**支倉六右衛門之碑**」を撰文。寺崎清賢編『奥州高館沿革志 一名平泉史蹟研究』を校  
閲(序の執筆は 1904.9 づけ)。
- 1909 (明治 42) 『伊達騒動実録』刊行。「宮城県立仙台第一中学校校歌」(前年に元茶畑に新校舎)。
- 1910 (明治 43) 木村眞卿墓誌を撰文(谷中霊園)。館山漸之進『平家音楽史』に序(館山漸之進の子  
の館山甲午は、1969 年平曲の無形文化財保持者)。
- 1911 (明治 44) 帝国学士院会員。藤原相之助『仙台戊辰史』に序文(「仙台旧臣」と肩書き)。「**昆陽  
青木先生碑**」(目黒不動尊瀧泉寺)を撰文(境内の青木昆陽墓は 1943 年国指定史跡)。「仙台浄瑠璃

- の考]、「天保二年設立図書館青柳館文庫並青柳文蔵伝」(文庫蔵書は宮城師範学校を経て、宮城県図書館・宮城教育大学蔵など)。**玄沢**に贈正五位、東京の贈位祭典で**資料を出展**、仙台で贈位祭。
- 1912(明治 45、大正元) 5月15日、坂本嘉治馬(富山房)と『**言海**』増補出版契約。「根岸御行の松」。  
『佐藤素拙伝』、『万葉集修身歌』。早稲田大学図書館「文明源流表彰展覧会」に出品し、講演「日本文明之先駆者」。「殉死を論ず」。
- 1914(大正 3) 勅任官待遇。「論語研究に就いて」、「八代将軍と蘭学輸入」。桃生郡須江村糠塚(現石巻市)に「大槻但馬守平泰常殞命地」を建碑、撰文(「十世孫」と肩書き)。
- 1915(大正 4) 「吾邦蘭学勃興の原因」、「辞書編纂の苦心談」。作並清亮編『東藩史稿』に序。
- 1916(大正 5) 従七位から正五位に昇位。『**口語法**』刊行(国語調査委員会編)、翌年『**口語法別記**』。**高松凌雲**墓誌を撰文(谷中霊園)。
- 1917(大正 6) 仙台の戊辰戦役殉難者弔魂祭に招かれ、県庁構内武徳殿で講演(白河の弔魂祭でも講演)し、講演「仙台藩挙兵の懐旧談」。所蔵の**青木昆陽自筆『和蘭文字略考』を複製、解説**。
- 1919(大正 8) 「著述病 老体の文彦翁訪問客を謝絶 言海の増補に苦心」(『東京朝日』2.9)。
- 1920(大正 9) 志羅山頼順・菅野弘編『平泉名勝誌』に序。
- 1922(大正 11) 6月、仙台一中創立三十年記念式に出席し講演。殉職した小野さつき訓導へ弔慰金と弔文。吉野作造、大槻校訂の『西洋紀聞』をも参考に「新井白石とヨワン・シローテ」を執筆。
- 1923(大正 12) 仙台一中学友会『創立三十年記念号』に講演録「学术研究上の注意」。吉野は、同号に「大槻先生が明治に於ける語学界の大先覚である点に因み」として「西洋人の日本語研究」を寄稿し、別に「ドンケル・クルチウス日本文典を主題として」を執筆し大槻に言及。
- 1924(大正 13) 磐溪に贈従五位。吉野ら教え子の壬辰旧雨会から、喜寿の祝いに木彫の胸像(曾村芳邨作)を贈られる(仙台一高蔵。それをもとにしたブロンズ像が1969年除幕され、校内に展示)。
- 1925(大正 14) 講書始の講師(「秋津洲の起源について」)。勲四等瑞宝章。
- 1928(昭和 3) 2月17日、東京根岸の自宅にて没**。法名、言海院殿松音文彦居士。正四位に追陞。高輪の東禅寺(初のイギリス公使館の地)の、玄沢、磐溪も眠る一族の墓所に葬られたが、墓は非公開。『言海』増補はサ行まで成稿。『国語と国文学』5巻7号「大槻大矢両博士記念」に追悼記事など。
- 1931(昭和 6) 如電没。
- 1932(昭和 7) 如電、大久保初男、新村出らにより『**大言海**』第1巻刊行(1937年、第5巻索引で完結)。
- 1938(昭和 13) 『復軒旅日記』(大槻茂雄校訂)刊行。
- 1943(昭和 18) 大槻如電旧蔵書(洋学関係書811部)が静嘉堂文庫に受け入れ(文彦旧蔵書も含む)。
- 1949(昭和 24) 『**言海**』第1000版(紙型焼失のため最終版)。
- 1950(昭和 25) 大槻家から旧蔵書など215点が宮城県図書館に寄贈され「大槻文庫」、展示会開催。
- 1953(昭和 28) 大槻家旧蔵資料約80部120点を早稲田大学図書館が購入し「大槻文庫」(のち、他資料と併せて「洋学文庫」)。
- 1956(昭和 31) 『新訂 大言海』刊行(1982年『新編 大言海』)。
- 1959(昭和 34) 大槻茂雄増補『新言海』刊行。
- 1968(昭和 43) 明治百年記念宮城県式典で先覚者として顕彰(大槻のほか、富田、吉野、本多光太郎、土井晩翠、志賀潔、阿部次郎ら計16名)。

- 1978(昭和 53) 高田宏『言葉の海へ』刊行(新潮社、のち岩波書店、洋泉社、2018 年新潮文庫)され、大佛次郎賞と亀井勝一郎賞を受賞。
- 1980(昭和 55) 山田俊雄編集責任『**稿本 日本辞書言海**』(宮城県図書館蔵自筆稿本の複製および初版 4 冊本複製と図録)刊行。
- 1982(昭和 57) 一関市役所に「大槻文彦先生の像」設置(2014 年一関市立一関図書館に移設)。
- 1984(昭和 59) 一ノ関駅前に「大槻三賢人像」設置。
- 1989(昭和 64、平成元) 宮城県図書館で「『言海』刊行 100 年記念 大槻文彦展」。
- 1991(平成 3) 一関市で「言海」刊行百年記念事業(展示会、シンポジウムなど)。
- 1994(平成 6) 早稲田大学蔵の「大槻玄沢関係資料」169 点が国の重要文化財に指定され、翌年、「おらんだ正月 200 年 大槻玄沢関係資料重要文化財指定記念 早稲田大学図書館所蔵 洋学資料展」。
- 1997(平成 9) 一関市博物館が開館し、常設展のコーナーに「文彦と言海」と「玄沢と蘭学」等。
- 2000(平成 12) 「20 世紀デザイン切手」シリーズ第 7 集に「大言海 大槻文彦」。一関市博物館で企画展「はるかなるヨーロッパ～蘭学者大槻玄沢の世界認識～」。
- 2001(平成 13) 仙台市博物館蔵「慶長遣欧使節関係資料」47 点が国宝に。
- 2002(平成 14) 『復軒雜纂 1 国語学・国語国字問題編』刊行(3 分冊の予定だが、2 以降未刊)。
- 2003(平成 15) 宮城県図書館蔵の『**言海**』**自筆稿本**、『北海道風土記』稿本、伊達家旧蔵『生計纂要』(玄沢ら訳『厚生新編』の初稿)等が**宮城県指定有形文化財**に。
- 2004(平成 16) ちくま学芸文庫から『**言海**』**縮刷版(1904)の複製**が刊行。一関市博物館で企画展「大槻磐溪 ～東北を動かした右文左武の人～」。
- 2005(平成 17) 伊達家旧蔵・宮城県図書館蔵玄沢ら編『環海異聞』写本、玄沢『金城秘韞』写本、磐溪編『英文翻訳彼理日本紀行』稿本が宮城県指定有形文化財に。
- 2007(平成 19) 一関市博物館で企画展「GENTAKU ～近代科学の扉を開いた人～」。
- 2011(平成 23) 一関市博物館で企画展「『言海』誕生 120 周年 ことばの海 国語学者大槻文彦の足跡」。
- 2013(平成 25) 仙台市博物館蔵国宝「慶長遣欧使節関係資料」のうち 3 点がユネスコ記憶遺産(世界の記憶)に。大槻家資料 5100 点が一関市博物館に寄贈され、「大槻家旧蔵板木」142 点(文彦『伊香保誌』、『小笠原島新誌』、玄沢『蘭学階梯』、磐溪『合衆国小誌』等)が岩手県指定有形文化財に。
- 2014(平成 26) 一関市立一関図書館が開館し、「言海コーナー」。一関市博物館で「版木と和本の世界」展(「大槻家旧蔵板木」など)。